
その男、孤独の狙撃種なり

アザトク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その男、孤独の狙撃種なり

【Nコード】

N5223X

【作者名】

アザトク

【あらすじ】

これは一人の『狙撃種』と呼ばれた男の物語。ネギま！の世界からこちらに来た男はなにを思い、なにを抱えて戦うのか？そんな感じで始まります。これは『その男、孤独の戦士なり』の続編です。一応、前作を知らなくても読めるように努力いたしますw

第一射（前書き）

どうもお久しぶりです

今回のこの作品はネギま！の方で連載させていただいている『その男、孤独の戦士なり』の弾がマジ恋に転生してきたという設定です。

ネギま！の方を優先して書いていくつもりです。

もしもこういうのがお嫌いなお方はバックしてくださいませませ。

第一射

「……ここは？」

気が付くと俺は仰向けに寝ていた。

うん、空が青い。

身体を起こして、俺は周りを見渡す。

森だと？

とりあえずは現状の確認だ。

「武器はある、服もあの時のを着たままだ……持ち物は他にないか」

ふむ、ここが魔法世界かも怪しいな。

身体を確認する。

「一応はなににもないみたいだな」

至って普通の13、4歳の身体だ。

「どつやらあの時のまま、俺はここに居るみたいだな」

点も見えるし、目も問題はないか。

少し自身の気が増えているような気もしなくはない。

さて、いつまでもここに居てもあれなので移動する……か？

気のせいかもしれないが遠くの方で爆撃音がした気がする。

行ってみるか。

身体の調子を確認めるべく、脚に気を込める。

長距離用の転移魔法符も無いからな。

「え？」

その違和感は足に気を込めた瞬間襲ってきた。

「少量の気でここまで身体強化が出来るだと？」

おいおい、マジかよ。

これなら虚空瞬動を何回出来ると思ってるんだ？

そんなことを思いながら俺は走る。

走るにつれて先程聞こえてきた爆撃音はより明確な物となり、銃撃音や怒声まで聞こえてきた。

3キロほど離れた場所から俺はスコープで戦場を見る。

「ドイツ軍とレジスタンスか……、中東かここは？」

向こうのレジスタンスが掲げている旗を見る限りそう考えて良いだろう。

「くくく、しかしまあ……何と言いますか俺と言っちゃつは」

つくづく戦場に愛されているらしい。

「良いぜ、ドイツ軍。魔法世界では連合と帝国の両軍に被害を出していたが、今回はお前等に味方してやる」

『狙撃種』とまで謳われた俺を味方につけたんだ、全てを終わらせてやるぜ。

そして俺は引き金を引いたのだった。

マルギツテside

私は今、奇跡を見ているのだろうか？

隣で『女王蜂』も一緒に私と同じように固まっている。

降り注ぐ弾丸、貫通した弾丸が跳弾した弾丸と弾き合い次の標的へと向かっていく。

一方的だった。

的確に我らの味方以外の全て、つまりは敵を一掃していく。

敵軍の戦車さえも銃弾は貫いて行くのだ。

神を信じない私も、今この時だけは思ってしまった。

「……神の御業とでもいうべきか」

いいや、少なくともこれは悪魔の所業か。

しかしこの戦場では狙撃できる場所など三キロ以上離れた丘しかないはず……

まさか

「おい、そこのお前！ その双眼鏡を貸せ！！」

私は部下の男から双眼鏡を奪う。

そして丘の上を見ると、薄焦げた茶色のマントを着た男の背中が見えた。

「……至急、中将閣下に連絡を繋げ」

この後、中東での紛争はすぐに終結した。

敵軍の全てが銃殺という結果で。

s i d e o u t

第一射（後書き）

始まりますW

第二射（前書き）

第二話です

本編をどうぞ、ご覧ください

第二射

マルギツテside

中東の紛争から1年、私はとある男のことを調べていた。

『狙撃種』と呼ばれる男だ。

世界の裏世界では今や時の人である、その名前

もはやその存在は『人間』というカテゴリーではなく『狙撃』という新たな種類、あるいは種族として考えられるほどの腕から来ているらしい

現に私の知る限り、はるか10キロ以上離れた場所からの狙撃をやすやすとやってのけるのだ。

当然ながら噂などではなくそれは現実で行われた。

荒れ果てた荒野

障害物の一切も無い場所のことだったし間違いはない。

「そこ、しっかり走りなさい！」

『イエス・ママ!!!』

私は新人の教育訓練を行いながらそんなことを考えていた。

そもそもだ、十キロも先だぞ？

常識的に考えてそこからの狙撃を行うのでさえ不可能に近いのに、奴は神業とも呼ぶにふさわしいほどの凄まじい跳弾技術と狙撃で一瞬のうちで数百人規模の殺戮が出来る。

化け物かあるいは悪魔か

奴についての謎は尽きない

今のところ、我らの敵ではないようなので問題はないがもしも奴が敵に回ったら……

「いや、余計な想像はやめておこつ……訓練止め！」

今日の訓練はここまでだ。

私は集合を掛け、解散をさせる。

ふふふ、さて今日もこの時間がやって来たな。

「ダン、貴様は少し残りなさい」

「イエス・マム！」

敬礼をするこの男……名前をダンと言う

私の一番弟子だ。

トンファアを武器としていて、私自身がこいつを気に入っているた

めに直接教えてやっている。

「では今日も訓練を行います、ついてきなさい」

「いえ〜す、ま〜む」

「なんですかその気の抜けた返事は、気を張りなさい」

「イエス・マム」

「よろしい」

まったくこの男は……

まあ良いでしょう、たっぷりシゴクだけです。

side out

「あ〜、疲れた」

どうも、弾です。

傭兵も飽きたので、ただいまドイツ軍に在籍しております。

流石に銃を日頃から訓練で使うと俺が狙撃種だとバレる可能性もあるのでトンファーを主武器で戦うようにしています。

いやあ〜、トンファーは良いね。

だって攻撃よりも防御面に優れているんだもの。

とは言っても銃火器とは違って、使い方が瞬時に理解できないから地道に一から訓練しているんだけどね。

軍での訓練が終わった後、毎日2〜3時間の練習

零からのスタートだから全てが新鮮に感じる。

しかし独学だとやはり限界があった。

その限界を感じていて悩んでいる時、俺たち第29訓練生部隊の教官であるマルギツテ・エーベルバツ八殿に俺の秘密訓練を見つけてしまった。

幸か不幸か、趣味が教育と指導な御方なので俺はすぐにその場で指導をもらったのだった。

多少、キツクはあったが教え方はうまく、俺もそれを覚えるために必死だった。

集団訓練の後、すぐに個人レッスン

この一年間、よく生き残れたものだ。

マルギツテ教官とはまあ、普通の訓練生よりも多少親密な関係ではあるだろう

主に師弟関係という意味で。

一年……いや、実質には二年の訓練も終えて俺は今日、正規の軍人

になるのだった。

ついに教官のシゴキからも解放されるのだ!!

しかしなぜだろうか？

昔、学生だった頃の新しいクラスがどこか？ ちゃんと自分はそのクラスでやっていけるか？

そんなちよつとしたドキドキ感があるのは？

そんな気持ち無駄なのに……だって。

「ようこそダン、私の部隊へ」

「やっぱりかあああああああああああああああああ!!」

うん、わかってたよ。

訓練生時代から散々、『貴様は私の部隊に絶対に来させてやる』って酒が入ると言われてきたもん。

酒が入ってなくても『そんなので私の部隊で通用するとも?』って言ってたし。

ちくせう、俺に安寧の時はこないのかもしれないな。

語りside

「ふむ、最近様子が変だと思っていたがこういうことか」

フランク・フリードリヒは微笑ましげにそう呟いた

「もっと必死に防ぎなさい！」

「いや、眼帯外した教官の攻撃を防いでるんだからせめて褒めてく
ださいよ!!！」

「黙れ野ウサギ!!！」

「ぎゃあああああああああ！」

フランクの視線の先には部活であるマルギッテが一人の男と訓練を
していた

「あのマルギッテが男と……ふふふ、やつにも春が来たということ
か？」

実のところフランクは心配していたのだ

マルギッテの家は代々がドイツ軍の家系である

マルギッテ自身も幼い時からドイツ軍に入り、自分の部下として戦
場を駆け巡った

だからか、女性としてなにかが欠けてしまったのは

冷血にして獰猛な戦士

それが戦場でのマルギッテの姿だ

彼女のそのような成長は“ドイツ軍 中将”としては非常に嬉しく
思える

しかし“父親”としてのフランクにとっては後悔の連続だった

実の娘であるクリスとはあまりにも違う

「あの笑顔、まるでクリスと遊んでいる時のような素晴らしい笑顔
だ」

だからこそフランクはこの光景を尊く思えた

「私が言える立場かはわからんが……応援しているぞマルギッテ」

今日はクリスと良い話が出来そうだ

そう思わずには居られないフランクであった

教官との訓練も終わり、俺は一人で訓練所に仰向けに倒れていた

「ああ、まだまだだな」

気での身体強化と重火器以外での戦闘がここまで苦戦するとはな

教官の攻撃は見えるのに身体がついていかない

「……悔しいなあ」

「ならもつと強くなりなさい」

「ごもつとも」

「って、あれ？ 帰られたのではなかったのですか教官!？」

気がつくと俺の頭の近くに教官が立っていた

「私は愛弟子を倒したまま放置しておくほど薄情ではないと知りなさい」

「いつもは放置しておくせに」

口に出して言ったら顔を踏まれた

「ふん、今のは貴様が悪い」

「すみませんでした」

「第一、師匠であり上官である私が来たのにいつまで寝ているつもりだ」

「立ちたくても身体中が痛くて立てないであります」

正確には動くと言が痛くて立ちたくない

俺がそういつとしばらく教官は考えた素振りを見せて

「なら、たまには弟子の世話でもするとしよう」

「へ？」

教官は俺の頭のすぐ横に座るとその膝に俺の頭を乗っけさせた

これはいわゆる膝枕というやつですか！？

「きよ、教官……なにを！？」

「こんなことも知らないのか貴様は。いいか、これは膝枕と言って

」

なぜか誇らし気に膝枕について語る教官

そんな教官がいつもの厳しいイメージとのギャップで凄く可愛かった

「どうかしたか、ダン？」

おっと、思わず顔に出てたか

「いえ、なんでもないですよ」

元の地球とも『ネギま!』の世界とも違う、この異世界に来た理由はわからない

でも俺は俺だ

自分の思ったことをするとしよう

「ダン、聞いているのか?」

「聞いてますってば」

とりあえず今はこの人の話に耳を傾けるとするか

第二射（後書き）

次回から原作突入させようか悩んでおります

主人公設定（前書き）

Fate風に作ってみました。

一応、これを読まなくても本編でも主人公について語りますが前作を見られていない方にはオススメです

主人公設定

名前 弾ダマ

身長 175cm

性格 混沌

武器・銃火器全般

筋力 B

俊敏 A

魔力(気) D(せいぜいワン子以下か同等)

耐久 B

幸運 B

宝具 A

スキル

【撃鉄の申し子】

己が手、もしくはは体の一部で武器と認識した銃火器の使い方が頭に流れてくる。

【銃痕眼】

発動した眼で見た対象のどこを撃てば一番良いかを教えてくれる魔眼、直死の魔眼のように即死ではなく致命傷や重傷を負わせることもできる。

【孤独な戦士】

一人で戦う場合、全てのステータスが上がる。

見た目のイメージは戦国BASARAの伊達正宗的な感じ、冷静な判断を常に下すが燃える時はとことん燃える

案外家事が得意。

憧れの人は天元突破グレンラガンのカミナ兄貴

死んだとき、神様に『なんでも好きな能力をやる』と言われたが特にチートにする訳ではなく『銃火器を触れたら身体能力上昇と、その扱い方が瞬時に理解できる』という能力を貰った。

しかし、神様はそれだけでは面白くないと思い、弾の眼に『己が認識したものの死の点が見える』能力を与えた。

『ネギま！』の世界で“大戦”で帝国と連合国の二大国を相手に戦った男、紅き翼とは敵対関係であった。

懸賞金が4500万という原作でのエヴァの賞金額を遥かに上回る

賞金首である。

しかし『完全なる世界』との戦いで造物主を下し消滅魔法を抑え込んだことにより英雄となる。

賞金首の撤回も考えられたが紅き翼の面々の要望や諸々の事情などでなどが却下。

本来なら大戦後、行方不明なのだが今回は『もしもマジ恋の世界に転移してきたとしたら？』というIF設定で作っている。

主人公設定（後書き）

どうでしたか？

不明な点などございましたら教えてくださいませ。

第三射（前書き）

原作に入るのはもう少し先になるかもしれない。

第三射

とある日の昼下がりに

俺は仲間たちと飯を食っていたら突然、放送で呼ばれた

呼び出した相手はフランク・フリードリヒ中将

天下の中将閣下が俺になんの用なのだろうか？

もしかしてなにかやらかしてしまったのだろうか？

そんな不安を胸に駆け足で中将閣下の執務室のドアの前までやってきた

「……腹をくくるか」

なにか問題をおこしたのだったらしっかりと謝罪しよう

それで許してくれなずに殺されることになるとしたら逃げよう

さあ、では行こうか

揺るぎない意思の下、ドアを二回ほどノックする

「ダンです」

『入りたまえ』

俺は中に入り、ドアをしめるとビシッと敬礼をする

「お呼びでしょうか、フランク中将閣下」

「うむ、座りたまえ」

言われた通り俺はフランク中将と対面になるようにソファに腰をかけた

「少し長話になる、コーヒーは如何かね？」

そう言っただけで中将閣下はコーヒーを淹れてくれた

流石に上官にそんなことをやらせなくなかったが最近の趣味らしいので引き下がることにした

ちなみに本気で美味かったことをここに記しておく

「一応、初めましてでいいのな？」

「はい、こうしてお話しさせていただくのは初めてでありますしいつもは部隊の視察にやってくる姿を多くの仲間たちが並ぶ後ろの方から眺めるだけだったしな

「君の履歴書を見させてもらったが君は日本出身のようだね」「そうですね」

まあ、色々とあつてしばらく帰れてないけどな

「サムライの国……前々から興味があつたのだよ」

目を輝かせて言う中将閣下

サムライの国……か

俺はコーヒを一口飲み遠くを見つめる

「どうかしたかね？」

「……今の日本はそのように呼べるような場所ではありませんよ」

汚職まみれの官僚や政治家

腐敗した政府

己の私利私欲のために圧力をかける老害ども

「国は腐敗し、外国からの圧力で常に崖っぷちに立たされている。

奇跡的なバランスで今は保たれているけどもいつ崩れるかもわからない状況です」

「なんと……では日本は私が思っているような国ではないと」

「それは間違いなく」

ガツクリと肩を落とす中将閣下

「それではもはやサムライはいないと言つのか……」

「お言葉ですが中将閣下」

俺は思わず反論してしまった。

「中将の考えるサムライとはいったいどのようなものですか？」

「それはもちろん、刀を持ち、戦う男たちのことであるっ？」

やはりか……まあ、それが普通の答えだよな。

「なら中将閣下のいうサムライは確かに存在しませんが……しかし私の考えるサムライとは役職でも刀を扱っただけの者などではありません」

「なんだと？」

「サムライとは日本語で『武士』とも言います。こちらの国でいう『騎士』に近い存在です。武士とは誇り高く、強く、己の全てを燃やすような熱き者達のこと……確かに国は腐敗しているが」

「

俺はそこで一度溜めて言う

「日本に武士が居ないと思ったら大間違いです

よ」

ニヤリと笑い、まるで威圧するかのようにつ。

悔しかった、日本の全てが馬鹿にされたようで。

確かに自分でも言った通り、国は腐敗しているかもしれない。

でもそこにいるすべてが腐っているわけじゃない。

少なくとも俺はそう信じている。

「もしも信じられないのであればご自分の眼でご覧になることをお勧めします。すべての者がそうだとは言いませんが、なかなか凄い人物たちが日本にはたくさんいますよ」

そこで俺は気づいた、中将閣下が呆けながらこちらを見ていることに。

「そうか……ふむ、なるほど。どうやらその通りだな」

なにやら一人で納得する中将閣下

「しかしおしいな、マルギッテが居なければクリスとのことも考えられのだが……」

「はい？」

どうしたのだ一体？

「決めた、ダン二等兵」

「はっ！」

「君は今から私の家にきなさい」

「……はい？」

これから俺はなにか面倒事に巻き込まれる気がしてならなかったのだった。

第三射（後書き）

感想をお待ちしております

第四射（前書き）

お久しぶりです

結構間が空きましたが、続きをどうぞ

第四射

「……なんじゃこのお城は」

思わずそう呟いてしまった

「ふふふ、驚いたかね？」

いや、驚くもなにもここが自宅とかきつと中将閣下は貴族かなんかなのだらう

門を潜り抜けて自宅の中に入るとより一層、その疑惑は強くなったのは言うまでもない

「お帰りなさいませ、父様！」

「おお愛しのクリスよ、今日も一段と妖精の如く美しいな」

家の奥から出て来たのは金髪の美少女だった

これがクリス嬢か

ここに来る途中の車でずっと中将閣下に聞かされてた

確かにこれは褒めたくなるような美少女だ

「おや？ 父様、そこにいるのは？」

「こやつはダン、マルギツテの部下だ」

俺は一步前に出て自己紹介をする

「自分マルギツテ教官の部下を勤めさせていただいています、ダン二等兵と申します」

別にここは軍隊ではないし、あそこまでガツチリとした挨拶はしなくて構わないだろう

「私の名前はクリスティアーネ・フリードリヒという、よろしくな」
スツと右手を出される

それに応えて俺も右手を出して握手をする

「互いに自己紹介もすんだようだしダンよ、着いてきなさい」

言われるがままに俺は中将閣下に着いていく

着いた先は応接室だった

先ほどと同じように俺は中将閣下と対面するようにソファに座る

「君を家に連れてきた理由だが単刀直入に言おう、日本に行つてほしい」

「日本に……ですか？」

「そつだ、来年の話だがクリスは日本の川神学園というところに交換留学生という形で向かうことになっていてな、君は向こうに先行

して現地の様子を見てきてほしい」

「そしてクリス嬢が来られた時には監視役というわけですか」

「理解がはやくて助かる」

なるほど、この人ってば親バカだろ

まあ、でも

仮にもドイツ軍中将閣下の娘さんだ

命を狙われるかもしれないし親としては心配なところなのだろう

「引き受けてくれるかね？」

「喜んで」

と言うか上官命令は軍で絶対だし断るといふ選択肢がもともとない。

つまりは既に日本行きは決められた宿命

「流石はダン君だ、そう言ってもらえると信じていたよ」

にこやかに笑う中将閣下

はあ……教官になんて説明しよう？

あの人の上官からの命令だし、なにこともなければ良いのだけど

偶然、屋敷に教官がやってきたのでさっそく為にやってみた

「……………もう一度言いなさい」

修羅が御光臨なされた

「ですからフランク中将閣下の御命令で日本に行くことになりました」

「……………」

無言で俯いてプルプルと震えている教官

ヤヴァイ、逃げよう

だがしかし骨が碎けるのではないかと思ってしまうほどの握力で肩を捕まれているので逃げることは下手に動けもしない

なんてこったいorz

「……………日本に行くのはいつからだ？」

「え、えっと、まだ未定です」

「そうか……………よし」

なにやら決意を固めたらしく、教官は俺の横をすり抜けながらトン

フアーを構えて殺気を放出させる。

「なにやってるんですか教官!？」

俺は慌てて教官を後ろから羽交い絞めにする。

「離しなさいダン!」

「いやいや、離したら絶対大変なことになりますからね!？」

「それでもです、私は今すぐに閣下の下に行かなければならないのだ!!!」

「なおさら駄目ですよ!？」

確実に中将閣下がなぶり殺されてしまう。

てか教官がここまでご乱心になるとはなにがあっただよ?

それから十分後、ようやく教官が落ち着いてきた

「……………なあ、ダン」

そう俺の名前を呼んだ教官の顔はいつも通りの凜々しさだが声や雰囲気はいつもと違った

「なんででしょうか?」

でもそれはきつと触れられたくないことだろうからあえて触れない

「貴様は今の部隊を離れて日本に帰りたいのか？」

「それはないです」

確かに日本に戻りたくないと言えれば嘘になる

でも俺は日本で暮らしていた時よりも、戦場を一人で戦っている時よりも今の生活が大好きだ

「自分は教官の部隊の皆と一緒に飯を食って訓練して、皆と一緒に戦って、皆と一緒に笑い合う、そんな生活が大好きです。それに教官の厳しいけど二人だけでの訓練も好きです」

たまに逃げたしたくなるけど

「……………」

気がつくと教官は再び顔を俯かせていた

顔が見えないから表情から心を読むこともできない

「……………そうか、よし」

なにかを決意したかのように呟いた後、教官は顔を上げた。

「ではこれより、部隊に戻って訓練でもするか」

「ふえ？」

有無を言わさない力で俺の方を掴む教官

第四射（後書き）

うん、ダンのキャラが崩れていないか心配だ。

第5射(前書き)

お久しぶりです、順次他の作品も投稿していきたいと思えます。

ただいま、にじふぁん、PCが復活したよw

第5射

「……………電撃作戦でありますか？」

日本に行くことが決定してから三日後、俺は『ドイツ軍 大将』の執務室に居た。

目の前に座る、軍服の胸ポケット辺りには二十個近くはあるバッジ、脂汗を掻いている肥満した身体

この豚のようなオッサンが大将だなんて、色々とシヨックだ。

「そうだ、聞けば君はマルギッテ少尉の部隊の仲間でもなかなかの機動力の持ち主らしいじゃないか」

「はあ……………一応は足に自信があるもので」

だが一番だとは思ったことは無いがな。

「電撃作戦は知ってのとおり、速さが命だ。君達マルギッテ部隊は以前として硬直状態が続く紛争地域に戦いに行っただけだと思っただけだ。聞いてね」

なるほど、状況を一気に動かす気が。

でも疑問に思うのは、なぜそれを俺に言うかだ。

普通ならマルギッテ教官かフリードリヒ中将閣下に話を通すと思うのだが。

「その作戦で、君には私から極秘の任務がある」

「電撃作戦以上の機動力が必要な作戦ですか？」

「理解が早くて助かる。君が言った通り、電撃作戦よりも遙かに速度を必要とする作戦だ」

大将は俺に机の引き出しから取り出した資料を見せる。

「マルギッテ部隊が電撃作戦で拠点を制圧をする前に、この男を殺してきてほしい」

俺は渡された資料に目を通す。

「敵の幹部ですか……了解です、やってみますよ」

「心強いよ、流石はマルギッテ小尉のお気に入りだ」

ニコニコと笑う大将

俺は挨拶をしてそそくさと部屋を出る

はあ……また教官になにか言われるのかなあ？

「そうですね、ならば迅速に任務をこなさない」

「あれ？ 特になんにもなかった」

訓練が終わり、一息ついている時に任務について話してみたが前みたいに怒られなかった

「任務なのだ、仕方がないことです。大将直々の極秘任務、光栄に思いなさい……それよりも」

教官は俺の両頬を掴んで引っ張ってきた

「“極秘”任務なのに他人に話すとは何事ですか！」

「いひやいいひやい、しゅみましえんでした!!」

なるほど、そつちで怒られたか

「イタタ、いやあれですよ。一応、教官には報告しといた方が良かなあ……と」

「ふんっ、まあ私に報告しようとした点については褒めてあげましょっ」

あれ？　なんか少し機嫌が良くなった？

相変わらず表情をあまり変えてくれないからわからないけどなんとなくそう思った。

教官は座っている俺の背中に自分の背中をもたれかからせて座る

「丁度明後日、私は部隊を率いて作戦を実行する。貴様は明日から現地へと向かうのだな」

「はい、そうです」

「ならばいつそのこと敵を皆殺しにするぐらいの勢いでいきなさい」

「冗談キツイツす」

「ふふふ、貴方は私の一番弟子なのですからそれぐらいのことをや
つてもらわねば困ります」

笑う教官の温もりを背中を感じながら俺は空を見上げる

どうにも嫌な予感がしやがるぜ

この時、俺は不覚にも気づいていなかった

俺と教官のことを見ていた一人の人影を

その夜、軍用ステルスヘリで俺は現地まで向かっていた

「もうすぐ現地上空に着きます」

パイロットの声を聞き、俺は深く深呼吸をする

現地……つまりは紛争地帯にあるドイツ軍の拠点

そこに俺はパラシュートで降り立ち、迅速にターゲットを捕縛する
それだけだ

「っ！？ 大変だ！！」

急なパイロットの叫び声

なにが大変なのか聞こうとした時だった

ドコンッ！！

ヘリコプターの後部が突然、爆発をして俺は爆風で外に吹き飛ばされてしまった

転移魔法符も足場になるものも存在はしない

だが俺にはパラシュートがある！

「パラシュートが開かないだっ！？」

なんだってんだ、ちくしょうが

俺は即座に地面を見る

およそ左100メートル地点に川が流れている谷がある

迷っている暇はなかった

身体を全力で捻り、流れを左へと向ける

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

見事に谷に入ることに成功した俺は急いで全身に全力全開の気を纏わせて水面とのクッションを作る

そして俺は巨大な水飛沫を上げて川に落下したのだった

「……………」

片目に眼帯をつけた赤い髪の女性、マルギツテ・エーベンバッハは空を見上げて呆けていた。

今は部隊の訓練中、普段ならば絶対にありえないことであった。

「はあ……………」

本日、何回目になるかわからない溜息

マルギツテがこうしているのには理由があった。

今朝、彼女の下に一つの通信があった。

『マルギツテ部隊所属、ダン二等兵の乗ったヘリが何者かに撃墜された』

とのことだった。

パイロットの方はなんとか不時着陸をして、重傷を負ったが命に別状はなかった。

しかしダンの方は高度数百メートルもある場所から吹き飛ばされたらしい。

死体は見つかっていないが、生存の可能性は奇跡に等しい。

「はぁ……」

自分にとって初めての弟子という存在

部下ともまた違った大切な関係

無理矢理だったが自分の部隊に引き入れてまで手元に置いておきたかった存在

「……ちょ……たい……ちょう……隊長!!」

「っ! どうかしたか!？」

部下の自分を呼ぶ声で我に帰る

「いえ、明日の作戦のための準備が一通り終わりましたのでお呼びしたのですが……」

話しかけて来たのは長年、共に同じ部隊で戦場を駆け抜けてきた女の副隊長だった

「あ、ああ済まない、つい考え事をな」

「……ダンの事ですか？」

「………そうだ」

やはりこいつには隠し事はできないと思いつつマルギッテは肯定した

「ふふふ、あれほど貴女がいれこんでいる男性は居ないものね」

副隊長は周りに人が居ないことを確認するとプライベートでの口調で話し始めた

「当たり前だ、ダンは私の弟子だぞ？ 他の男などと一緒にしてもらっては困る」

心外だと言わんばかりの強い否定

それがおかしかったのか副隊長は笑い出す

「本当に貴女はダン君のことを思ってるわね、しかもその思いって……いいえ、あえて言わない方が面白そうね」

副隊長の言い方に疑問を持ったがあえてマルギッテは聞かなかった

「そういえばダン君の生存は確認されたの？」

「それがまったく……数百メートル上空から吹き飛ばされてからの行方が一向に判明していない」

「そう、なら大丈夫ね」

なぜか楽しげに言う副隊長

「案外、彼ってば本当に敵を殲滅してるんじゃない？」

「ふっ、そうかもしれないな」

確かにダンの生死は不明であり、行方も不明

しかしながらマルギツテを含み、部隊の皆は彼が死んだとは思って
いなかった

それは信頼

ダンも部隊の中で、しっかりと信頼される存在となっていた

「さて、では私たちはそろそろ仕事に戻りましょう」

「そうだな、明日の作戦のこともある。早めに終わらせるとしまし
よう」

マルギツテはもう一度空を見上げる

「ダン……貴方は今、なにをしているのですか？」

「ぶはあっ……！」

落下地点から二百メートルほど下流

立てば襟足ほどの深さしかない川に辿り着いたダンはなんとか岸へと上がる事が出来た

「けほっ！ けほっ！」

とりあえず息を整えることを最優先にする

「はあはあはあ……死ぬかと思った」

実際、途中で意識を失っていたし危なかった

「まったく、なんだってんだよ」

悪態をつきながらも身体の破損状態を確認する

「左の脇腹が三本骨折、全身打ち身、右肩が少し反応が遅くなったか」

内蔵機関は無事のようにだし思ってたよりは全然マシだな

この世界に来て気が一般人よりも高くなったおかげであんな防御方法も使えるようになった

だがあまり実践では使えないな、気の使用量に対して防御力が釣り合っていないさすぎだ

「しかし……ここはどこだ？」

少なくとも戦場ではないわな

とりあえずは歩いてみるとしよう

歩くこと三十分、俺は森を見渡すことの出来る丘に辿り着いた

「……………なんだよ、ありゃあ？」

遙か先、そこに広がる美しい海

その海の上に建設されている巨大な塔……………むしろ要塞があった

あそこが目的地ってのは理解した

理解したならば行動だ

丘から下りて、森の中を進んでいく

この森、一見普通そうに見えてただの森ではない

巧妙に隠された罠

遅効性の毒を持つ危険な生き物たち

もう少し進めば今度は監視の目も厳しくなるだろう

ここまでされると俺のターゲットがどのような人物か気になってきた

時間があればちゃんと調べたんだが……………

黙々と目的地に進んでいく

ついに残り一キロまで迫ったというところで問題が起きた

「……………随分と嚴重だな」

ここから約二百メートル先

武器を持った多くの兵隊が巡回をしている

あそこを五秒以内に制圧することは確かに可能だ

だがしかしここで敵襲の存在を教えるような危険を犯すのは愚行

ならば他の道を探すまでよ!!

そう思い、俺は辺りを警戒しながらも搜索する

「……………ここは」

搜索すること十分

俺は一つの川を見つけた

この流れの向こう、どうやらあの城と繋がっているようだ

「……………」

試してみる価値はあるか

俺は川の中へと飛び込むのであった

第5射(後書き)

感想をお待ちしております W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223x/>

その男、孤独の狙撃種なり

2011年11月22日02時53分発行